

< 国内情勢 >

佐藤鐵太郎 海軍中將

忘れられた「海主陸従」の国家戦略家

— 前編 —

藤 井 巖 喜

(国際政治学者)

佐藤鐵太郎（1866-1942）は、海軍兵学校第14期の出身であり、帝国海軍の中將であった。1923年に現役を引き予備役となり、1934年には貴族院議員に勅選されている。1942年（昭和17年3月）逝去している。

ミッドウェイ海戦で日本軍が大敗を被る3か月前であった。

佐藤鐵太郎の名前は、今日の日本では殆ど知られていない。しかし彼は幕末明治以来の日本の近現代史の中で、最も明確な**海洋国家日本の戦略**を打ち出した国家戦略家であった。日露戦争後の日本は、彼が理想とした国家戦略とは全く異なる道を歩み、その結果として昭和20年8月15日の敗戦に至った。

一般にはそれを日本の近現代史の必然性のように考える人も多いが、その現実決して必然ではなく、日本には他に歩むべき国家戦略の道があったことを佐藤鐵太郎は明快に示してくれている。佐藤鐵太郎は日本が大英帝国に倣い、**海主陸従**の国家戦略を採用し**工業国家・貿易国家**として発展する道を指し示した。日本の本質を**大陸国家**（ランドパワー）ではなく、**海洋国家**（シーパワー）と捉え、工業と貿易により経済発展する道こそが最良であると主張した。

その発展の道を守る為に、強力な海軍の育成を訴えたが、陸軍に関しては海軍に付属する補完勢力としての意味しか認めなかった。

日露戦争以降、日本が朝鮮半島や満洲に国家発展の道を求めることに、佐藤は危機感を覚えた。そして、それが日本の亡国に至る道だとして、強力な反対の論陣を張った。しかし、1910年に日韓併合を実現した後の日本は、ユーラシア大陸東部への進出を国家方針とし、佐藤の主張する海主陸従の国家戦略は全く顧みられなくなった。それが結局は大東亜戦争の敗戦、即ち大日本帝国の崩壊という結果を生むのである。

佐藤鐵太郎が主張したような国家戦略が採用されていれば、大日本帝国はもう少しバランスのとれた帝国主義国として発展することが出来たであろう。そして恐らくは、対英米戦を回避しえたはずである。今、ひとたび、現在の時点から佐藤鐵太郎の国家戦略論を検討することは、極めて重要な知的作業である。何故ならそれは日本が今後、同じ過ちを繰り返さずに先進文明国家として発展してゆく為の、現在から未来への国家戦略論の基礎となるからだ。

今日においても日本の国家戦略の基本は、海洋国家であることの本質を踏まえた海主陸従論でなければならない。米中対立時代と呼ばれる現代において、日本の進むべき正しい針路を見出す為に、佐藤鐵太郎の国家戦略論を読者に紹介したい。

海主陸従、そして自衛重視の国家戦略

佐藤にはいくつもの主著があり、彼の国家戦略論を理解することは比較的容易である。佐藤の戦略思想の根幹をなしたのは、マハンのシーパワー理論と大英帝国の歴史研究と孫子を代表とするチャイナの戦略論の3つの要素であった。

佐藤は「国防方針決定の3大要素は、①地理的条件、②経済への影響、③国民民生への配慮」であると述べている。

ちなみにマハンが『海上権力史論』を出版したのは1890年（明治23年）であり、日本語翻訳版が出版されたのは、その7年後の1897年（明治30年）である。佐藤の歴史観は進歩史観ではなく、歴史は繰り返すと考える、謂わば「循環史観」である。彼は全ての物事は、現れ方は異なっているようでも、その法則性は古今を通じて同一であると考えた。

ヘーゲルやマルクスは「歴史は進化する」と考えたが、近代歴史学の祖であるランケや古今東西の多くの賢者は「歴史は繰り返す」と考えた。この法則性の一つが現代用語を用いれば、「地政学」と言えるだろう。

佐藤は国防の3大要素は「地理的条件・経済・国民への影響（民生）」と考えた。そこから当然、日本が地理的条件としては海洋国家であり、経済を発展させ、民生を充実させる為の国防である、という考えが導かれる。

明確に言えば、佐藤の国防論は自衛重視であって、侵略を否定するものである。佐藤自身の言葉によれば、英国史の研究から導き出された歴史の法則は「自衛に遠ざかり、侵略に近づくは畢竟亡国の基」というものである。つまり自衛重視であり、積極的な対外侵略は寧ろ亡国への道として否定している。

海洋国家日本の自覚を基礎とする彼の国家戦略は、最少の費用で最大の効果が発揮される国防体制を選択する。それこそ「海軍主・陸軍従」の国家戦略である。佐藤は海軍の必要とする兵員数が少なく、志願兵制でも十分に国家を防衛できる点を強調する。そして国民の軍事的負担を軽減できる。また海軍の軍備の充実は、民間経済への波及効果が大きい。海軍主力の国防予算の支出は、造船・海運・鉄鋼・機械・電気・工学・通信などの産業発展に大きな効果を産み出す。

今で言う「スピノフ効果」である。

佐藤は日露戦争で国民が多大の犠牲を負わされたことに鑑み、まず巨大な兵員数を必要とする、それ故「徴兵制」を必然とする陸軍の規模を縮小し、志願兵だけでも運用できる海軍の充実を訴えた。同時に海軍軍備への投資は、様々なスピノフ効果を産み出し、経済効果も甚大である点も強調している。

日本は工業を発展させ、貿易によって資源と市場を海外に求め、国家発展の道を図るべきだ。その経済ネットワークと国家を安全ならしめるものこそ、海軍の役割でなければならない。大陸に進出すれば必ず他国との戦争、特に大陸国家との戦争が不可避であり、それは著しく国力を消耗させる。

イギリスは、ヨーロッパ大陸の制覇を諦めて7つの海に植民地帝国を建設し、大英帝国の繁栄を確かなものとした。こういった道をこそ、日本も歩むべきだというのが佐藤の主張である。

ドイツの過ちも指摘

日本は地政学的に海洋国家であるから、当然、「海主陸従」の国家戦略をとらなければならない。しかし大陸国家の場合は当然、「陸主海従」の国家戦略でなければならない。この点も佐藤はよく認識していた。

1910年（明治43年）に出版した『帝国国防史論』（完成版）では、本来、大陸国家であるドイツがその本質を忘れイギリスを敵とし、海軍軍拡競争に国力を費やしていることを批判している。ドイツにとって国防の主役は、あくまで陸軍である。陸軍を強化したからこそ、分断国家であったドイツを統一することに成功したのである。このことを忘れて、海洋国家イギリスに対し、海軍軍拡競争を挑んだドイツは愚かであった。

明治43年、『帝国国防史論』を出した年は、西暦では1910年である。即ち第一次大戦開戦の4年前である。この時、佐藤は早くも英独対立におけるドイツの敗北を予言している。恐るべき先見性である。

佐藤自身の言葉を引用しよう。

当時のドイツの海軍軍拡は、「軽重の分を誤り、海を先にし、陸を後にするが咄きことあらんには、これ実に同国（ドイツ）衰運の基礎なりと謂わなければならぬ」

（『帝国国防史論』下 146 ページ）

また佐藤は第一次大戦初期に、決してドイツ軍は英国国内に進軍することは出来ないと断言している。つまり本来、大陸国家であり、陸軍の強化に集中すべきドイツが海軍軍拡を重視しすぎたあまり、イギリスと対立路線に入り、また第一次世界大戦に敗北するという現実を佐藤はいち早く予見していたのである。

皮肉なことは、当時のドイツ皇帝ウィルヘルム2世は、マハンの『海上権力史論』を愛読し、「ドイツの行く末は海洋にあり」と確信し、イギリスをライバルとする大海軍軍拡に乗り出したのであった。

この海軍軍拡路線が、ドイツをして大海洋帝国イギリスと衝突させる路線を歩ませたのである。第一次大戦は複雑な戦争ではあったが、基本は覇権国家イギリスに新興国ドイツが挑戦した戦争であった。もしドイツがヨーロッパ大陸内の覇権に満足し、敢えて海洋国家としての発展の道を選択しなければ、英独の2か国が開戦する必然性は生じなかったのである。

たとえばドイツが、チャイナ山東省のチンタオを租借し、太平洋のマリアナ・カロリン、マーシャル、ビスマルクなどの諸島を植民地としていても、それ事態はイギリス帝国の権益を大きく脅かすものではなかった。南洋諸島のドイツ植民地は、本国からあまりに遠距離に隔絶しており、イギリス植民地帝国に脅威を与えるようなものではなかったのだ。それは寧ろ、海洋に発展しようという大日本帝国に

対する潜在的な脅威であった。ところがドイツは欧州においても英国の海洋覇権に挑戦し始める。ドイツはデンマークから良港キールを奪い、やがてバルト海と北海を結ぶ近代的なキール運河を完成させる。ドイツは1890年、エルベ川河口近くにあるヘルゴランド島を英国から獲得する。ヘルゴランド島は、北海をコントロールする要衝の地である。エルベ川の下流にはハンブルクがあり、ドイツ海運業・造船業の中心として知られている。

1902年10月に発行された英国の政府白書では、「ドイツ海軍が英国への脅威である」と警告している。世界最強の陸軍をもつドイツが、世界第2位の海軍力を持ち、イギリスの権益を脅かそうとしていたのだ。独ウィルヘルム2世は英国のビクトリア女王の孫であり、当時の英国王ジョージ5世の従兄弟であった。

ウィルヘルム2世は、「自分の中の英国人の血が、ドイツを海洋発展の道へ導くのだ」と叫んだが、皮肉なことに、血の近さが悲劇的な結果を生んでしまった。

日英同盟が締結されるのは1902年の1月である。日英同盟の第1の仮想敵国は、いうまでもなくロシア帝国であった。しかし同時に英国側から見れば、日英同盟の第2のターゲットは増大するドイツの脅威であった。

前述のように太平洋方面、南洋諸島で植民地支配を拡大するドイツを牽制する為にも、日英同盟は有効だったのである。